

三才圖會

造化參神堅說

上

6
2
208

東泉圖書					
二冊	三八號	五架	六函	屬	類

二本

造化參神略說目錄

上之卷

御名は出所

一丁

天之御中主神の御名義

三丁

天之御中主神は神徳

六丁

天之御中主神の御座所は説

七丁

天之御中主神は御社の事をも

八丁

高皇産靈神まゝ其亦御名どめは解

九丁

神皇産靈神又其異名をもの釋

十四丁

明治九年圖書局發行

高皇產靈神 二柱故併せし牟須比神也云事 十六
神皇產靈神

高皇產靈神神皇產靈神比神德上 十七丁

下之卷

高皇產靈神神皇產靈神の神德下 一丁

高皇產靈神神皇產靈神比御座所 三丁

高皇產靈神神皇產靈神の御社 四丁

產靈神二柱小 或も天之御 關涉る事ども 八丁
中主神のみ

神魯岐神魯美命 十七丁

造化參神略說上之卷

石見 可部赤邇謹撰

御名の出所

古事記 卷上 云天地初發之時於高天原成神名天之御中

主神次高御產巢日神次神產巢日神此三柱神者並獨

神成坐而隱身也云々

日本紀 神代 一書云又曰高天原所生神名曰天御中主

尊次高皇產靈尊 皇產靈此云次神皇產靈尊

古語拾遺云又天地剖判之初天中所生之神名曰天御

中主神ナカノミカミ次高皇ツギタカミ產靈神ツギタカミ。古語多賀美武須比コトヒノタガヒ次神ツギタカミ皇產靈ミタカミ

神カミ。是皇親コノミカミノカタチニ神カミ。彌命タマヒナヒコノミコト云々。

古事記コトヒコト上卷ウヘノキタマヒ云高木神タカキノカミ。

日本紀ニホンキ神代卷カミヤマトノキタマヒ一書云一云神高皇カミタカミ產靈尊ツギタカミ云々。

三代實錄サントヨノサツロク陽成天皇ヨウセイノミカド元慶三ゲンケイノミ云コトヒノミコト薦枕高御產ノモロタカミ栖日神カスミ云々。

同書ドウショ清和天皇スミヤケノミカド貞觀十八ケイカンノハチジウハチ云アメンタカミ天高結神アメノタカミ。

新撰姓氏錄シンセンセイシロク河内國カハチノクニ神別カミワケ弓ユミ云アメンタカミ天高御魂アメノタカミ乃命ノミコト。

延喜式神名帳エンギシキカミナマヒ壹岐嶋イツキノシマ壹イツキ云タカミ高御祖神タカミノオヤノカミ社ヤシロ。

古事記コトヒコト上卷ウヘノキタマヒ云カミ神產巢日御祖命カミノツクリノミコト。

延喜式神名帳エンギシキカミナマヒ出雲國ツクシノクニ出雲郡ツクシノノ郡阿云アキ同社神魂カミタマヒ意保刀イホタチ自ミミ神カミ社ヤシロ。

同式同帳ドウシキドウチョウ同國ドウクニ同郡ドウノ郡杵キ云カミ同社神魂カミタマヒ伊能イノ能ノ知チ奴ヌ志シ神カミ社ヤシロ。

同式同帳ドウシキドウチョウ同國ドウクニ同郡ドウノ郡伊イ云カミ同社神魂カミタマヒ伊豆イヅ乃ノ賣メ神カミ社ヤシロ。

新撰姓氏錄シンセンセイシロク大和國オホヤマトノクニ神別カミワケ云カミ牟須比命ムスヒノミコト。

倭名鈔ヤマトナマヒ二卷ニクワン云カミ產靈ツクリ日本紀ニホンキ云カミ產靈ツクリ和名無須比ニギハヤヒ乃ノ加美カミ。

新撰字鏡シンセンジキョウ部ベ示シ云カミ社ヤシロ方止カタマドシ反サカサマ以テ酰アキ記キ司命シノミコト也ナリ宇牟須比ウムスヒ乃ノ豆マツ利リ。

拾遺集シウイシツ君見れキミミレぬむヌムさサぶブにニ加カみミぞゾうウらラめメしたシたタらラ。

れかき人何れもけむ。

詞花集云「心さるむきぶのかみや造りけむきく
けしたも見えぬきみか形。

長清集云「とけやらぬ人れあゝ海れつらおとめむ
すぶのかみあうらみつふのれ。

春雨抄云「信濃ある相ぞめかをれはと小くもすく
せむきびのかみはほこませ。

狭衣物語云「いと加くとも造りれを聞えさせやせむ
すぶれかみさる恨めをきれど云々。

いねとひ日記云「すぎもく道子目小との社あり人
さるむきぶのかみとぞ聞ゆれ云々。

奥義抄云「むすぶれかみを産の神あり云々。

今世も形むきびれかみまとえんむすびのかみを
どいると。

赤邇云「猶高皇産靈神、神皇産靈神の御名も書どめ小。

高御産日神とも。高彌牟須比命とも。高媚牟須比命と

も。高御牟須比乃命とも。高御魂命とも。高魂命とも。神

御魂命とも。神牟須比命とも。神産日神とも。神魂命と

も記されあり。高御産巢日神、高御産栖日神、天高結神、
神産巢日神、高御産巢日神、高御産栖日神、天高結神、
せれば、更よ
を掲げ交。

天之御中主神の御名義

天之御中主神 天を古史傳云、阿米と訓る。阿米と
蒼々として、上方より始発て、四方より廣く遠く見遙
加さゆ、疆界を云ふ。まよと天、日をもちて此疆界ある
其内字與を云ふ。竹の節と節との間を、即世間とも云
ふ。漢籍は宇宙と云ふ、これか御宇と申は、この世と云ひ
る世間と云ふ、多し、漢風小を御宇と申は、この世と云ひ
る君と云ふ、世人の世、我が世、おど云ふ、如し、扱末と凡

て障る物れく、廣く遠く、疆界め何も無き處、虚空を
云ふ。はと此與の中も、いと廣く遠く大小ある限、無
の如く、唯空く見ゆ、故小、大きを曾良と云ふ。此の
阿米と曾良と與と各々異か、事小を有れど、其差別
のさざり、見分ち難き、故小、又相通たし、阿麻都
曾良と扱、この大虚は外方、涯りあること、何を以
て知る也、云む小、此を見極むること、能わざとも、神
速須佐之男命の天壁立極、巡坐而云々と有る、故考合
せ、云るなり、抑阿米てふ名、義を网小て、阿美阿麻阿
牟阿麻牟とめ、活用と云ふ、今見放る、了後、斯の

如く。四方小向伏し。廣く遠く壁立たる状小見えて。漢
小天圓如倚蓋と云ひ。まゝと爲蓋象天かども云ひ。まゝと
字書よ。口を莫狄切音覓覆也。从一。下垂也。とも見ゆ。
此頂上の處を邪ち北辰小て。此をり四方より下垂る
流の。下の方を。大地小障る見えられず。大凡圓形形
る事と思え。然れど上下左右れき。の如くなれど然
らば。北辰の處を上小て。左を東。右ハ西か。此北辰の
域小て。すれち世界の。大綱か。りされど諸越籍小天
網恢々疎而不失とも。天網雖疎終不漏也。なとも云り。
さて阿米を上下四方小圍繞て。圓形ある時をいづく
と指す。名くるなやうなきか。如くかまきども主とは其
本網たる處を云ふ。きき云。まぐめ更なり。○赤迹云。天
の本域は事小就ては。吾父も造化元運三天私考と云

を認て。試小云れ。とるをめあれど。因り。はて此阿米て
舉まほし。けきと。長をれ。れ今もい。は。は。て此阿米て
ふ物ハ。何時成るとる。邪らむと云。傳をきれ。ど知る。か
らば。されど強て。擦ふ小。其本綱たる處を。北辰と共
物ある。る。此を譬へ。だ。彼芽の萌騰れる。ハ。火の然る
が如く。阿米の成れる。ハ。其烟の普く四方小。充じとれ
る。有けむ。御中を。記傳云。眞中を云む。の如し。凡て眞
と御ハ本通ふ辭形る。後小を分て。御ハ尊む
方。御字。御書も。此意あり。但し。此字を漢因よてハ。王の
うへ。は。限りて。云。を。此か。よて。美といふ。多。天皇の御
も。何。は。も。限らば。凡。人。小。眞。を。美。稱。ると。甚。あ。く。云。と。全。き
は。と。り。用。ふ。されど。古の言れ。遺れる。は。邪。通。を。し

て眞熊野マコノ也。も。三熊野ミクマノとめ云る類多く。又眞マコノと云べき
を御ミ云るも。御空ミソラ御雪ミユキ御路ミチふど多り。御中ミナカも此類
あり。天アメのみれらば。因ユヰ之御中ミナカ里サト之御中ミナカありとめ。萬葉歌
小あり。俗言サヘコトよ。ママ中ナカといふも。眞中マコノあり。凡ソ眞マコノをな
む。俗言サヘコトの。又毛モ那ナ加カ也云め。眞中マコノに轉ウツれふ。て。天武紀
於オぬなり。小コ天中央ソラノモナカ也あり。此コ字を以て。此コの御ミ主ヌシ大人ウシと
小コも。能ノ宇斯ウシの切キまるれ。宇斯ウシを主人ウシと書ること
の大御父オホミコ彦ヒコ主人ウシ玉タマ又續紀ツグキ。故ユ古コ小宇斯コウシ也。必カナラ某ナニ之ノ宇
阿倍朝臣アヒノチノミ御主人ミコノウシあど是コトあり。故ユ古コ小宇斯コウシ也。必カナラ某ナニ之ノ宇
斯ウシ之ノ加カ牙カたふ小云。奴斯ヌシハ某主ナニノウシと直タビ連ツラネて之ノを

加カ牙カぬ小云。飽アキ昨クニ之ノ宇斯ウシ能ノ神カミ大背飯オホセヒ之ノ三熊ミクマノ之ノ大人ウシ。
大因オホクニ主ヌシ神カミ。大物主オホモノヌシ神カミ。事代主コトシロヌシ神カミ。經津主フツヌシ神カミ。あむの如コト也。又
書紀ヨ。齋主イハヒヌシ神カミ。號ナヰ齋イハヒ之ノ大人ウシと見え。又丹波美知能タニハミチノ宇斯ウシ。
王ミコ波ハ書紀ヨ。小コハ道主ミチヌシ王ミコとある。是コトらを以モ知チ。さして宇
斯ウシ波ハ久クと云も。其處ソコの主ウシ也。領居シヨクイるふとれ也。され
ば此コト神カミ也。天真マコノ中ナカ小坐コイ々々て。世中ヨの宇斯ウシたふ神カミと申コトに
意イ此コト御名ミナれるる也。○赤迹アカノ云コト。なほ此コト大神オホカミの御名ミナの事
けるとも。何れど。長ナガ巻マキ。小コ就ツクてハ。予コト古傳コト翻案フタリ論コトひた
きハあゝ。小コを舉トげ。

天之御中主神の神徳

古史傳云。天之御中主神也。御名の大れる小取て其
事蹟は傳ふれ故に。神徳を伺奉る傍を便あやれど。二
柱、皇産靈神をり前る。始、かく御坐し。女男の御徳は兼
有ち。爲こと無し。産靈の根原を司給ひま。寂然小坐
まし。女男産靈大神ハ。其神靈小資て生出坐して。産靈
の徳用を持分け宰給ひ。天地も何も。此二柱大神の
産成し給ふは事とぞ思えは。故舊く。天御中主神、長
男、高皇産靈神。次神皇産靈神と云る傳、め有る。此、事
語拾遺、異本小見え。まと神皇正統記小も。此、説を記さ
れとゆ。○赤迹云。御鎮座本紀小も。天御中主神、太子、高

皇産靈神ともあり。但し彼紀ハ。正しき書
小あらざれど。正しき例小あは。がと。然れど。天之
御中主神の事蹟は聞え給え。は。幽き所以ある事
小て。却りて其神徳の大なる故小ぞ有。○記傳云。
臣の祖ありと云ひ。或ハ因常立尊の配合よ。○又云。
皇后ありれど云き。心よは。せとる。妄説あり。○又云。
此大神ハ。志も。無始とり坐ませば。最第一は神小坐と
と申、め更小。因之常立神を。最初と。非あ
ま。と。靈の眞柱小も云る。を見て知。唐書、宋史
など小。皇因の事を記せる。初主、号、天、御中主、とも有
り。其御功德は。廣く大なる。と。稱す。申は。る。き。詞も。那
志と知。阿那加志。阿那多布登。○又云。姓氏録を

始め書ども小。天御中主命幾世孫。某命を有。小泥。るの
らば。此大神を。あらゆふ神等。元祖神小坐せば。誰神
也。此神子係たらむも難。○赤迹云。あほ下産靈。大
も。此大神の御上。宜らざる。得
ばる。やころあま。合せ見ても。

天之御中主神の御座所説

古史傳云。此大神の御在所。何處ぞと云ふ。記傳小。た
中。坐々て。とのみ云。えれたる。い。の。さ。て。い。何も
れ。き。大。虚。空。小。坐。ま。せ。る。趣。よ。て。餘。り。小。た。ど。く。あ。く
聞。れ。此。も。天。の。最。中。れ。い。や。高。く。寂。寞。小。ま。て。動。き。徒
ら。ざ。る。處。す。れ。ち。謂。も。依。北。辰。小。て。よ。れ。天。の。本。綱。と

る處。あ。依。の。御中主大神也。此處小鎮。坐せる。れ。ゆ。扱

それ。と。ゆ。五。百。綱。千。綱。字。引。延。て。編。成。せ。る。如。く。宇。宙。は

万。物。故。悉。く。主。宰。と。給。ふ。事。と。聞。え。る。ゆ。万。葉。十。九。天

網。波。布。乃。天。歸。月。乎。網。爾。刺。我。大。王。者。蓋。爾。爲。有。と。見。え

久。堅。乃。天。宗。天。皇。の。大。御。言。小。も。如。調。八。弦。琴。所。治。賜。天。下

と。い。へ。る。れ。ど。こ。か。此。大。神。の。宇。宙。を。主。宰。ゆ。給。ふ。と。り

移。し。云。こ。と。小。て。有。色。物。一。も。洩。る。と。事。ゆ。給。ふ。と。知

古。語。拾。遺。に。引。く。大。御。神。及。二。柱。産。靈。大。神。も。天。中。所。生。之

神。と。あ。る。よ。つ。き。古。傳。翻。按。小。就。と。見。て。と。又。矢。笠。翁。の。八

天之御中主神は御社の事ども

八十乃隈手云。天之御中主大神。崇祭れる御社は無
た。誰も訝ふとれるを。或説小。大和国^{イニキ}の城下郡な
は。服部^{ハトリ}神社小や坐らむと云るも。實小然るはくふむ。
赤迹云。此式^{ハトリ}服部神社二座。磐鞞とある社。て。信
友が考証の此神社の條小。姓氏錄云。大和国神別。服部
連天。御中主命十一世孫。天御杵命之後也。△大安寺村
今稱波都里神。○和名抄云。山邊郡小。服部波止利あり。
△今上。書件。の終。○
も。然り。下本。と云り。又世小天一神と申て。祀れるぞ。此大神
あらむと思ふ由ありて。別記にける物あり。○神代
物語百首云。矢野翁云。此大神神也。祖也。祖也。祖也。無上至

尊小ははしおひま。式も小社の連小入給するハ。甚
も悲しく畏き事の極あり。いので天朝小め伊勢大宮
のぶと。嚴重小祭に奉り給えむ御事もが。となむた
出られあるも。實小尤ある事小ざに。ちて其御社
は。伊勢国鈴鹿郡。天一歛田神社。播磨国佐用郡。天一神
玉神社。赤迹云。玉字一古本小王とある由。信友も百樹
年八月庚辰在播磨国正六位上。天一神。授從五位下。又
云。丁亥在播磨国從五位下。天一神。預官社。○今東新宿
村。有稱阿布良權現社。此乎。○和名抄云。天一神。○百鬼
經云。天一神。和名奈加々美。天女化身也。○家榮抄小。永
久四年十二月二日。縫殿頭。依法性寺殿。命。天一神のあ
る方角を注進せるとあり。按りもしくハ。天一神王よ

て、ナカ、ミと稱せふ小やあらむ。吟云、八考乃隈手
○文明所記東大寺戒壇神名帳小も、天一、太白、牛頭
天王云々あど、坐て。式よ載てあれど、今ハ甚く衰
ありといふゆ、坐て。神王の玉を假か字小も。万物ハ大祖
た系神靈の義あるはし。神名帳比保古。此神社の下小
天御中主尊也。伊豫国温泉郡湯山亦有天一神社。於雨
乞度々有靈驗也とあり。凡ほ紀伊国小も同社數多
はせり。○赤迹云、あは此大神の御社ハ事小就ても古
傳翻按テ論ひおける了ともあきど、長々れバ
例のお、小
きいせに。

高皇産靈神まゝ其亦御名をもれ解

高皇産靈神タカミムスヒノカミ 古史傳云、本小。皇産靈此云美武須毗也
あり。古語拾遺小、古語多賀美武須比、新撰姓氏録ハ高
弥牟須比命あどある。是訓の証あり。なほ此神の
御名を、書等小、高御産巢日、神高御魂、命高魂、命なども
書とあり。皆御紀の訓注、古語拾遺あど小、依多訓るし。タ
カンスビなど唱ふるも、音便小類きたる。後世ハ訛、凡
ゆ。○赤迹云、牟須比の比を清て訓る。其由も下小注
し。御名、義高も高天原れ高と同じ。御功德を稱すて申
せふれるはし。別御名をも、高皇も御と書々るめ同く。
美稱あり。赤迹云、記傳産を正字小て、宇牟須と云言の。
宇坂省けるれ。仁徳天皇の大御哥小、子新撰字鏡小。
祇宇牟須比万豆利とあり。此も産靈祭小て、牟須の正

語也。宇牟須ウムスあは證アキれ也。今イマめ生ナは。宇牟須ウムスといふ因イめ
多加タカ也。出羽イデ、秋田アキタあどアトふてハ、燕ツバメをさるるヨ、ウムスと云
あど云ふ類ルイあり。○赤迹アカノアト。生ナは記傳キデン云。男子オトコ女子メノコはと苔コケ
云。我ガ石見イシミなどもモあかゆ。生ナは記傳キデン云。男子オトコ女子メノコはと苔コケ
の牟須ウムス形カタど云ふ牟須ウムス小コて。物モノの成ナリ出イる云。牟須ウムスかぞ
ぬ。まマと草武佐クサタケサ。靈レイ字ジハ。比ヒと云小コとく當アタれ也。凡スベテて物モノの
受ウケなどめ何ナニゆ。靈レイ字ジハ。比ヒと云小コとく當アタれ也。凡スベテて物モノの
靈異レイイ形カタを比ヒと云ふ。久志クシ毘ヒの毘ヒ比ヒ古コ比ヒ賣ウあど比ヒ
も。靈異レイイある由ユの美稱ミセイれゆ。まマと禍津マガツ日ヒ直ナホ毘ヒあど比ヒ
め此意ココノイれゆ。平田ヘイデン翁ウ云。牙カの備ホも同ドウくすあそち火ヒある
る由ユの美稱ミセイ。種タネ々々用ヨウ。ちまチマバ産靈サンレイと云。凡スベテる物モノを生成ナリ
ひ弘ヒロめた也と所思ソシゆ。ちまチマバ産靈サンレイと云。凡スベテる物モノを生成ナリ

はあやれ。靈異レイイれる神靈シノレイを申マウにあり。此外コノトキ小コ火産靈ヒサンレイ和
久産クサン巢ス日ヒ津速魂ツツハヤタマ興コト台産靈トクサンレイ安牟須ヤスウムス比ヒ玉留タマドメ産日サンニチ生ナ産日サンニチ
足産タラサン日ヒあど申マウに御名ミナめ何ナニゆ。牟須ウムス比ヒの意イ皆ミナ同ドウ也。今イマ云ク
云以下クニシタ古史コシ傳デン小コ翁ウの心ココロを用ヨウひて引ヒキれとる也。更さらり已や
聊聊無な小コあらばみむ。○赤アカ邇ニ云。産靈サンレイハ。牟須ウムス比ヒと比ヒを
清スガて訓ナる也。紀キヨ。皇産靈ミヤサンレイ此ココ云。美武須毗ミフスヒ興コト台産靈トクサンレイ此ココ云。
許語コトコト等ナド武須毗フスヒと註ツケせられ。三代實錄サンダイジツロク小コ天高結神テンカウケツシノ祝詞イハヒコト
式シキ。火結ヒケツ神カミれどある小コ因イて濁ナりて唱ナゲふるもあろ也。
其ソノ古事記コトコト神名式カミナシキ。姓氏錄セシニョクを始めて書等カキナド小コ産巢日サンスヒ也

も。産日ムスヒ也。も。産栖日ムスヒ也。め。武須比ムスヒ也。も。牟須比ムスヒ也。め。無須比ムスヒ也。め。武主比ムスヒ也。も。記せ依類也。數ふる小違阿ら交也。雖毗字ヒ被用ひたふハ。あゞ御紀ヒに訓注のこ小て。御紀小志の毗字ヒ被用ひられしるめ。已ヒく記傳小も書紀ヒより多ヒく用ひられしるめ。云々と云れたヒが如く小て。必ヒ清音ヒ此字字用ひられしる所小此字被用ひられたる所一とこヒ所小あら固ヒとゆ濁音と也。決ヒめがとせられど數多所ヒおられバ。なゆ。形ほ此事也。玉加豆良四卷小委曲ヒ子論ひとまば。今もる此大槩被云のみ。

高木神タカキノカミ 古史傳云高タカも上小同じ。今云高皇産靈神タカヒメノカミのヒ高ヒも同じとの謂れ。

木キ也。記傳云具比グヒの切ツギ也。たる小も。即産巢日ムスヒ也。申ヒ此也。同意也。其故也。角ツノ杵シ神カミ活イ杵シ神カミの杵シ也。具美グミ也。通ヒひ也。具牟グム也。も活ウツく言れり。されど角ツノ杵シハ。角ツノ具牟グム也。同意也。かゆ。葦アシれど小角ツノぐむと云め。角の形カタして生オヒ初ツムる被云。又なぞと本草ヒ生ヒ初ツムる被ヒ葦アシぐむと云。具牟グム也。凡て物の初ヒと云。涙の出初ヒるも。涙ぐむと云て。まゆ芽キサす被云辭ヒれど。産靈ムスヒ也。同意と也。云れ也。三代ヒ實錄ヒ小。筑後国高樹神ヒと云あり。此神ヒも。たゞ地名れど小て。別神ヒ也。あらば。○平田翁云。清寧天皇卷小。高木角刺ヒ宮とある也。地名あり。又此ヒの小。高木比賣ヒ。高木郎女ヒおど云も見ゆ。地名れる也。薦枕高御産栖日神ヒ 古史傳云薦枕ヒも高の發語ヒ小て。

此を後小かく稱する物なるを。武烈天皇卷哥り、
波志須岐神樂哥小古毛万久岡部翁説小い小しる蔣
良太加世乃与止仁かどあり。岡部翁説小い小しる蔣
坂以て枕せし事は万葉七よ。薦枕相卷之兒毛在者
社十四小麻乎其母能於夜自麻久良波和波麻可自夜
毛れど詠ふ小く知し。十四の哥も真小蔣の同じ枕
高を連くはあとき。日本紀私記小師説古以蔣爲枕云
高之眼目故欲言高之始有此言乎と云す。はらば床
上小枕を殊小高くはる物れば。事めりく高と云ふ
や有む。漢籍楚辭九辨小堯舜皆有舉任兮故高枕而自
適とある注よ。安臥垂拱万国治也といふ事

ある時を寝る枕干として安うらぬを。世平かれど高床
小安臥する坂高枕はと云る小てたのづから相似と
る事。はと掃部寮式大嘗宮神坐の料よ。坂枕一枚五尺
五寸廣三尺。料編薦一枚。生絲一兩とあり。或傳小此神
床の八重疊は下小。其薦坂かい敷て高くはと云ふ。然
れば枕の方高くて。床上斜形まど。坂枕と云り。是ぞ上
代の臥床は状なるはきれば。薦枕高しと云め。此意れ
るるごとあり。さて神の御名小め。發語を冠ふは。眞
髮觸奇稻田媛薦枕志都沼值命れど。猶多加り。
高御祖神 赤邇云高も。高皇產靈神。高木神かどれ。高

小同じく。此大神は産靈の神徳の廣く大きく坐まはると
美稱し辭御祖と。神人万物は御祖を申は義小て。都
て世間小有やある事ハ。此天地を始免る。乃は物類を
悉く産成し給ふ。本は御祖高御祖大神と申は意の御
名れり。おほ此御名の高皇産靈神の亦御名れる事
天高御魂乃命まと天高 古史傳云。天てふ言を冠ら
せて申せはも美稱れり。

神高皇産靈尊 赤邇云。此高の上は神也。衍文小也あらば然るは
或は神字を削り。或は高字を削り。あどせ神伊佐奈伎
るた。大關主も云きたるが如く。並非小て。

命。神速須佐之男神。神饒速日命れどは。神を同く稱名
あり。神代紀葦芽小と。神皇産靈尊とある本を採ま。こ
る本も何れもつとるをよや。はまど神高皇産靈尊を
素戔嗚尊の類ひあるは。と云。はまば高皇産靈は
高め。皇め。美稱れまは。神や。高と。皇と。稱辭は三重れり
るは御名小ぞありきる。

神皇産靈神又其異名をめは釋

神皇産靈神 古史傳云。御名の義。まは神皇に加牟美
を訓はし。高皇と並びるは稱辭あり。今云。記傳の産靈
は義上。高皇産靈。小同じ。此神は御名を書等。神産巢
日。神産日。神魂命れど書

るきカミムスヒと訓み神御魂命とも書
と依り此と同くカムスヒと訓べし

神産巢日御祖命 古史傳云迦微牟須昆能美於夜能

命を訓るし。大土之御祖命大山罪乃御祖命さて御祖

命を訓るし。などこれ之祖といふ例あり

としめ申はる此神を女神小て諸の神等の本つ御母

の神小坐せばあり。記傳云御祖命としめ申せるも産

又云記中凡て御祖とハ母云る例れハ山城國賀茂

御祖神社おども然ゆ抑父の於夜あるは本とゆは事

かふる小母はとも殊小云る所以子母の許は生長

事小ふむて父とも御祖親睦く同家小在る故宮段暮の

山之下氷壯夫春山之霞壯夫とて兄弟の神伊豆志袁

登賣大神を聘し處小其母の種々計ごちし事あり此

今云大國の主神の八十かり田計ごちし事あり此

と意とく似とゆ凡てかゝる事どもハ父を知らず中

々小母の事執り知あつるハ殊ハ親し故あり

か○赤邇云諸の物類を悉皆高皇産靈大神也此大神

也。二柱の産靈小とゆて生出れど彼大神也高御祖神

也稱焉此大神を神産巢日御祖命とある奉れるは

尤れ也とも尤ある御名小ざりけり

神魂意保刀自神 古史傳云神魂也迦微牟須昆と訓
來れる小依る也。師説の如く凡て古言ハ同言の二つ
ぞこれも神美と美の重れるをぎ約めて一つ云例なれ
多く約めて申し習焉はれるべし。大也稱辭刀自也岡
部翁の説れ如く允恭天皇紀小戸母此云親自とあり

て。戸も家自ら主の義れ也。神祇官の宮主也。美夜自也
唱ふる類あり。後此物語書ふ。いゝるあるじまよと云ふ。即是あり。ちて御
紀小。戸母と書ふ也。古より戸内此事を母ある人の。老を
いふまで執つれど。母ぞ家主ある故れり。教子なる上
秀明云く。我郷あといふも。今も家内小て。専と事執る
婦人を家主と云ふ。母あまも母云ひ。母無れど妻は
あつ云と云ゆ。古よりちて此神ハ。女神も。産靈の内事を
意の存れるれゆ。ちて此神ハ。女神も。産靈の内事を
掌給へば。大刀自神やハ申はあり。

神魂伊能知奴志神 古史傳云。此御名も。かた大國主
神の石子焼著れど死給する故。活し給するぬどとゆ。

負給牙依小也。

神魂伊豆能賣神 古史傳云。おの御名も。心得がとけ

れど。伊豆も清祀意あれば。産靈の徳は稱すて申せ依

御名小也。

高皇産靈神 二柱を併せて牟須比神と云る事

牟須比神 古史徵開題記云。新撰姓氏録は 天神の御

裔の諸氏は本祖也。或も高魂命と云ひ。或も神魂命と

いひ。此二柱大神は係たるが多か依事ハ。此二柱神

の産靈は御間小しめ。天地は鎔造まじ。世間の事を起

給ひて。生坐る御子千五百座坐はし。産靈は元は大神
小坐ませば。八百万神たち。言もてゆきむ。此二神の御
子。形らぬも無れむ。か。此二柱神の産靈は元祖
故申は。天之御中主神小坐れ。故諸氏の出自
は。此神は係たるめ。彼此あり。か。れ。氏小とめて。高
魂命は係け。神魂命小係けて云る。小然しめ。拘を依
る。小非。唯産靈神の裔と。大朴。心得て有。高
と大和。因天神。門部。連牟須比命。兒安牟須比命。之後
也。也。牙有。をも思ふ。高とも神を。云。唯小牟

須比命と云るを。赤迹云。乃加美新撰字鏡。豆利と見え。拾遺集。詞花集。長清集。春雨抄。狭衣物語。い
ざとひ日記。奥義抄。かど小むすぶのかみ。又むびの
かみといひ。今世もあむすびのかみ。ま。えんむす
びのかみ。かど云。ると。上御名の出所。れ。件。り。擧。とる。が
如。ま。と。豊秋津比賣命。少名毘古那命。れ。と。高皇産靈
神の子とめ。神皇産靈神の子とめ。見え。久米直を。高魂
命の後とめ。神魂命。れ。後とも云。是。故。あり。

高皇産靈神神皇産靈神は神徳上

記傳云。世間。有。あ。は。と。此。天地。始。免。萬。物
物も事業も悉る皆。此二柱の産巢日大御神の産靈小

有レの中レ小レめ仰テぎ奉ルる儀ク。崇テ奉ルる儀ニ神ノ小レ躬ニ坐ス。
きる。○古史傳云。此師說今云上件の説ふ。小レ就テ。篤胤
猶考ふる小。高皇產靈神ハ。男神小坐々て。產靈ハ外事
板レ掌レ坐シ。神皇產靈神ハ。女神小坐々て。產靈ハ内レ事ハ
かむ掌レ給フなる。然るを記傳ニ。產靈大御神ニ二柱坐
た。二柱並ニ出テ給スる處ニなくし。或時ニ高御產巢日
神ハ。或時ニ神產巢日ハ。御祖命トかニ一柱ノみ出テ給ス
る。其御名ニ異レれども。唯ニ同ニ神ノのぶト聞エるニ。抑カ
く二柱小レ髻シて。一柱ノ如ク。一柱ノと思フるニ。二柱ノし
て。其差ハ髻シたニいと深キ所以ニある。其事ハ顯テ
こと小レぞ有ルまニと云レれしニ委カらば。其事ハ顯テ
れて。物小見えぬ依蹟ハ以テ二於三ノ云テ。天照大

御神ハ。天石窟小幽居坐ル時ハ。皇美麻命ノ天降坐
むトにレ系シ時ハ。御天降ノ時ハれニめ。高皇產靈神事執
給スるニ。是ラ外事ト云フるニ。事トもナ。まニ大名持神
の。焼石小焼著レ。死給スるニ時ハ。蚌貝比賣ト。蛤貝比
賣ト板降シて。活カさニめ給スるニ。はニ少毘古那神ハ海
とレ依リ來シ坐ル時ハ。大名持神ハ兄弟トなりテ。固造固
免ヨと詔命給スるニ。内レ事ト云フるニ。事トめナるニ
を。神皇產靈神ハ。給ヒ。其御名ノ出タるニ。神產
巢日ハ。御祖命トあり。御祖命トも。多く母ハ云フ。例ハれニ

女神小て内事を掌賜ふこと疑れし。猶言を。神名式
小。出雲国出雲郡。神魂意保刀自神社と云あり。刀自
とは。女小いふ稱ふとぞ。此も一の證を以てする。此を神
大刀自と云ふ義。櫛八玉神の禱白せる言小。神産巢
見むえ非ふとぞ。日御祖命。天之新巢。疑烟乃。八拳垂まで焼舉とあ
るめ。大刀自神。御厨の内事小預か。給す。なる。正
扱此。二柱の男女大神。産靈の御徳。間と。諸の物
類め事業。め生成り。神多ちも生坐。ふと。此由。云は
い。少毘古那神。古事記小。神産巢日。命の御子。とあ

る。御紀小。高皇産靈尊。兒也。あり。古語拾遺も同
記。よも。古事記と同傳。載して。召久延彦。問時答曰。此
者高皇産靈尊之子。少彦名神。故遣使。白於天神。于時高
皇産靈神。聞之。而云々といひて。是と。はた豊秋津比
下。御紀と同じ。は。傳を記せり。ある。一書小。神皇産靈神。兒と云。傳あり。は。姓
氏録小。久米直。高御魂命。八世孫。味耳命。之後也。と云ひ。
は。久米直。神魂命。八世孫。味日命。之後也。と云ひ。
思ふ。味耳。味日。同人。小て。耳。ハ。日を。二。此を諸の
神。と。ち。二柱の産靈。御間。生坐。る。が。故。子。加。く。二。方

小傳とるれ也。本朝事始り。加奈止美命と云を。高皇産
るき由何。儲まよ御紀小。高皇産靈神は御言小。吾所産
兒凡有千五百座と詔す。出雲風土記に。神魂
命の御子と云る。多く見とれども。高御魂命の御
子と云る。一柱と小有。凡て出雲風土
記小。神魂命
といふ御名のみ有て。高魂命の御名も。一所も見え。大
名持命は宮造のこととを命せ給ふ事も。御紀には。高
皇産靈尊とあるを。其まら風土記小。神魂命の御
量。以といる。其を彼記の傳々も。多く御子小。つま
云ふれ。此は神あり。二柱神の御間小生。坐れども。神皇産
靈命も。御母小當に坐る。故に。御子ば専と。此

神小係て。語に傳ふ。故ぞかし。ちまど姓氏録には。こ
命は後といひ。或も神魂命の後と云る。小掬をらば。高
皇産靈神の御末と。隔かく心得て有。き物ぞまよ
或は天御中主神の御末を云る。いとめ。彼此あるを。猶
その本祖を云る。小て。其は産靈神小係らざ。は。無
れぞ。是また掬をる。其を實り。養育と給ふ事とは。此
べた事ありあらば。神は御業あり。と。後小。何ぞし。御母神たち。御子
は育と立給る。趣小。思合せ。多。曉る。後之餘母神
多。育と給へる。趣。大。名。牟。遲。神。の。御。母。刺。圍。若。比。賣。味
鉏。高。彦。根。命。の。御。母。多。紀。理。毘。賣。命。佐。太。大。神。の。御。母。支
佐。貝。比。賣。命。春。山。之。霞。壯。夫。の。御。祖。也。其。儲。ま。よ。高。皇。産
子を見立と。事などを考。見。候。し。靈神も。表小立坐て。外事。掌たまひ。神皇産靈神も。裡

小立坐て。内事掌たまふ趣ある小據る思ふ。貞觀
儀式立皇后儀の宣詞小。食因天下。政波獨知倍伎物爾
波不有。必母斯理倍乃政有倍之。也て皇后を定めて。閩
中れ政成給ふよと。古より行ひ來れる事ミワギのよし見
えたる。其本も産靈大御神の形し始免。傳子坐依道子
なむ有る。されど了る。伊邪那岐命。伊邪那美命。偶
命偶まこし。大造之績を成し給る。まよ天忍穗耳命
小。豊秋津比賣命の女。玉依毘賣命。偶ひて。迹々藝命。生
坐る。よめ次々小。其御嫡后をぞいと重なる物。よ撰び給
ゆめ。まよ是とゆ及て。凡人れ上を思ふ。よ。夫も外事を
掌り。婦も内事をいそし。みよ。兒を育むを始め。家内の
事ども。専を行ひて。戸主とさる。稱ふこととは。此謂小因

あといれま。上件れあといめ。思ひ通
して。此意を。子孫忘るは。じた物あり。ちて皇産靈大
神れ諸神を生給る。依も唯その男女れ産靈の互小芽
し合ふ。妙小奇。た御徳れ間とゆ。産成給。子依ふて。夫
婦の道。よ資。あや小。た非。夫婦の道。を伊邪那岐。伊邪
是。産靈れ大御徳。小も有る。依。夫婦の道。小由らで。る
上とゆ。疑ひ。思。えむ。産
靈の徳。を。知。ざる。もの。ぞ。神等の。こ。形ら。ば。諸。れ。物類。は
更。あ。ゆ。天地。ま。さ。子。小。鑄。造。と。ま。る。る。産。靈。れ。趣。も。是。小
準。る。て。想。像。奉。る。は。く。ま。よ。生。と。し。生。る。物。ども。人。を。更
小。め。云。ば。其。神。魂。性。情。靈。智。も。悉。く。産。靈。神。の。賦。物。あり

由はめ辨ふべき。漢土の古説は天は主宰する神ありて業も悉く其神靈小資て成り人の生質は此大神の古傳の遺せるも其神は賦る由字云るは此大神の古なりかし。

造化參神略說

造化參神略說

下

6
2
208

東 京 圖 書 館

二册	三八号	五架	六函	屬	類
----	-----	----	----	---	---

二本

造化參神略說下之卷

石見 可部赤邇謹撰

明治九年圖書局發行



高皇產靈神皇產靈神は神徳下

記傳云天地初發の時大虚空小一物の生初めしも其

の分れ天地と成まゑめ又此、次々は神等の成坐る

も悉小皆二柱の産巢日大神は産靈小をらばと云ふ

ゆれし。服部中庸云其産靈といともく靈はく奇し

る限はあらば然る漢人形ど此、天地は始をくさぐ

さ臆度は加いあげ小説なまを皆おの産靈は神靈

小因て生おとを知、古史傳云おの師説今云以上

勿論カシ小依コヨヲ篤胤トクノ猶考ナホふる小顯宗コケン天皇紀三年二月ニ月ツキ也

處トコロ。月神ツキノカミの人ヒトヲ著カキして御託ミサトシませ依詔言ミコト小我祖オカミヤタカミ高皇

產靈神ウツルミカミ有預鑄造ウツリシメアメツチラ天地之功ツチノミヤコト宜ヨク以テ民地タミチ奉ホム云々ト詔ミコト牙コト也

志ココロのぞ山城ヤマシロ因葛野ウツノ郡歌荒ウツノ樺田ハクダを奉ホムと給タマフひ。今イマ本靈ホノミタマ字

字ジあれたを脱ダシとるなり今補イダシひて引ヒキつさて預ウツき字書ジヤク小

豫也先也ウツヤクとある義タマシを取トルる書カキれしおまだ其意ミコトを得

てハヤクと訓ウツぶしまとアラカジメと訓ウツむも然シカドるは

を生成ウツたまへふ事コトある因ウツ那岐ナギ伊那美イナミ大神オホノカミの因ウツ土ツチ

とる小多コタ委ウツのら彼カニ二柱ニハしら神カミの因ウツ土ツチを生成ウツ給タマフるも

即ウツ皇產靈ミコノミタマ大神オホノカミの產靈ウツルミタマと因ウツこも非ヒれり○赤迹アカノシ云イハレ靈

字ジの下シタヲ脱ダシ字ジありと云イハレまとるも實マコト小コさる言コトなぐら

神カミを尊ウツ小更コタまほを死シと小コなむはるを神代紀カミヨノキまと神

武天皇タケノミコ紀形キガタど小御名コミナの出イデとるところをカミ代紀ヨノキまと神

無ムれむムあア此コノ字ジ書カキ下シタ竟ウツと記ウツされたは所トコロをカミ一ヒトをカミこも

て御託ミサトシはせる詔言ミコトよ以テ磐余田イハレノタ獻ウツ我祖オカミヤタカミ高皇タカミ產靈ウツルミカミ神カミと

詔ミコト牙コト也トし加カぎ詔言ミコトのまにマニ獻ウツて給タマフむ對馬ツシマ下縣シノ直

坂サカして侍祠イニキ志ココロ免給ウツ牙コト也ト此コノ日ヒ神カミの詔言ミコト小も天地ツチノカミを鑄

を前の月マエノツキ神カミは詔言ミコト小ゆコト鑄造ウツルミを漢籍カンシヤクどめり造化ウツルミ之所トコロ

鑄造ウツルミ也形カタど見え無ムと物モノを自然オノカミの運行ウツルミ小依コヨて造ウツ

作ウツとし小言コトれむ然シカドる意ミコトを得トルて本無ホノムと天地ツチノカミを造ウツ出イデ

給へ事小成文カキナされむ。和名抄。漢書注云。鎔鑄鐵形也。和名伊加太とあり。

さて日神月神とめ小伊邪那岐神比御子ある小皇産

靈神比我祖アガミオヤを詔言依事ミコトコトクを。上小も云産靈比本モト初皇祖ミオヤ

神小て有も系神等もみふ此神の産靈小因ユて成坐シ初

れむ形ゆ。さく師め言たまし如く。是時比由縁ユヱと見え

て。山城因葛野郡ナガノ坐月讀神社。名神大月次新嘗。大和因

十市郡小目原坐高御魂神社。二座。並大月次新嘗。〇か

田タ也。やめて此郡郡在り。〇赤迹云。六の二座比中の一

座比比おとは下御社下御社のとこ為小小ゆづりて。おお小小い

え。對馬因下縣郡小高御魂神社。名神大。など神名式式見

え多多也。赤迹云。比中壹岐島壹岐郡小高御祖神社。月讀

何る社社をめ比起原起原も當昔當昔の詔言小由由る

こと玉加豆良一巻一巻委委しく云るが如く。抑抑かく後世

まで其處々小重重く祭祀祭祀を給ふ比以以て彼神彼神著比詔言

比小縁小縁おらぬ程程をも。皇産靈神の御功比大大お系系ほむ

を。め。想像想像を奉る奉るは。古事記序小參神作造化之首首と

何系參神を天之御中主神高皇産靈神神皇産靈神を

申せ依形ゆ。此文比もてめ。古く産靈神比天地を造り。

万物比産成たまるタマハルと云古傳を尊信タフツミと系系おを比思

ふ信信し。造化とて漢籍漢籍をも。天地寒暖の運行小とゆ

。造化參神略説下

を鑄造す。万物を産成し給ふる也。二柱は産靈大神を
る也。天之御中主神小かかけ。參神造化の首を作とし
も云る也。いか小といふ。天之御中主神は靈小と
て。二柱産靈神を生ひ出さる。造化の大元乃大元。えか
地万物を産成し給ひ。造化の大元乃大元。えか
天の御中主神は留れ。造化の大元乃大元。えか
斯も記されたるものあり。又云。あほ下産靈神二柱
小或主天神は御關涉る事どもと。標とする所は。あ
神等の神徳を巨ると。ろあき。何えせみくと。

高皇産靈神皇産靈神は御座所

古史傳云。皇産靈大神二柱也。天日は御國小も御坐し
初れ。此。あや。石屋戸の事と。始。皇美麻。其本
は御在所也。天之御中主神と同じ北辰あるが故小。其

御本體也。永く其所小神留坐し。遙けく遠く隔て。此

國土をゆり。終り其御形は見奉る。あをれ。故小。古傳

は隱御身矣と。語り傳とる物あり。師云。御形體の無き

得る也。後世のあまさか。しら。少名毘古那神の事

は。神産巢日命は。自我手。僕。久伎。斯子也。と詔へるを思

ふ。る。御身無くて。御手ある。傍たり。此。手。僕。の。出

と。世。人の。心。小。え。如。何。思。ふ。ら。む。凡。て。神。代。の。故。事。は。假

此。言。の。如。く。見。る。也。例。は。漢。意。の。辭。然。る。故。記。傳。小。此

小。して。悲。く。古。は。傳。の。意。は。背。け。り。然。る。故。記。傳。小。此

神。た。ち。也。今。云。天。之。御。中。主。神。と。天。地。を。ゆ。り。も。先。ど。ち。も

成。坐。初。れ。也。た。は。虚。空。中。小。も。成。坐。し。な。む。故。也。い。ま。ど。天

○造化參神略説下

○四

先小在、高天原と云する即其處あり。古事記に於高天原成といひ。書紀一書小め高天原所生神としめ云る。後小天地成る。其成坐せし處高天原小なり。後まで其高天原小坐々神たちあるが故なり。元來高天原ありて其處小成坐と云小ありらば云れしは委しからば。赤迹云ふか天之御中主神の御所のとろろなど考合はるる

高皇產靈神神皇產靈神比御社

古史傳云。皇產靈大神多。いみじた御徳おほ故。上代と曰殊小重く崇祠らせ給ひ。まお神武天皇の御世

小大御身づから顯齋し。高皇產靈神は祭り給ひ。は鳥見山中小祭庭は構あり。皇祖天神を祭り給ひ。おと見えあり。また神名式。神祇官西院坐御巫祭神八座並大月比首小。此二柱神坐り。此神等は祭り給ふ事も神武天皇の御世とゆ始め。さて八座は神產日神高御產日神玉積產日神生產日神足產日神大宮賣神御食津神事代主神小て清和天皇紀。貞觀元年正月廿七日神祇官无位神產日神高御產日神玉積產日神生產日神足產日神並奉授。從一位同年二月丁亥朔神祇官從一位神產日神高御產日神玉積產日神生產日神足產日神並奉授。正一位とあり。○因よ云ふ八神の中小上は五神の神位を授奉。きたる小下三神の神位を授奉。られし事れきた。此三神を延喜の頃かど小加奉。きたる小。貞觀の頃多。いまだ八神小加えり給。わざとし故なり。ゆ

の注。一。般。と。百。三。十。五。段。と。の。傳。を。見。り。あ。る。○。赤。迹。云。神。産。日。神。を。始。り。高。御。産。日。神。を。次。り。第。一。ら。れ。た。る。小。就。く。六。人。部。氏。の。説。も。あ。ま。だ。因。小。爰。り。舉。ま。ほ。し。け。れ。ど。未。定。れ。説。と。た。ぼ。し。く。て。多。の。ま。も。れ。せ。む。も。い。か。ら。洩。し。り。此。餘。小。め。此。二。柱。神。祇。祭。れ。る。社。と。神。名。式。今。多。加。添。中。よ。高。皇。産。靈。神。に。御。社。と。山。城。因。乙。訓。郡。羽。束。師。坐。高。御。産。日。神。社。大。月。次。新。嘗。○。羽。束。と。和。名。抄。よ。身。羽。西。南。羽。束。石。森。大。和。因。添。上。郡。小。宇。奈。太。理。坐。高。御。今。在。志。水。村。と。云。ゆ。魂。神。社。大。月。次。相。嘗。新。嘗。○。師。云。持。統。紀。新。羅。の。講。魂。神。社。奉。り。給。る。五。社。の。中。小。菟。名。尾。と。あ。る。と。此。社。あり。ま。と。三。代。實。録。小。法。華。寺。薦。枕。高。御。産。栖。日。神。と。何。て。正。三。位。ま。と。從。二。位。字。授。奉。り。給。ひ。し。も。此。社。あり。十。市。郡。小。目。原。坐。高。御。魂。神。社。二。座。並。大。月。次。新。嘗。○。清。和。天。皇。紀。貞。觀。元。年。

正月廿七日。從五位下。目原高御魂神。從五位上。とあり。按。二。座。の。中。一。座。と。決。免。て。神。魂。命。あ。る。一。座。と。伊。勢。因。度。會。郡。小。伊。佐。奈。岐。宮。二。座。と。あ。り。て。一。座。と。伊。佐。奈。彌。命。れ。る。類。餘。小。も。例。多。り。ゆ。○。赤。迹。云。志。の。一。座。と。天。照。大。御。神。小。て。神。魂。命。は。あ。ら。じ。と。所。思。る。の。一。座。と。旨。あり。其。七。玉。加。豆。良。小。委。く。記。せ。れ。ど。今。多。云。對。馬。因。下。縣。郡。小。高。御。魂。神。社。名。神。大。○。此。社。を。仁。明。天。皇。承。下。清。和。天。皇。貞。觀。元。年。正。月。廿。七。日。從。五。位。壹。岐。嶋。壹。岐。上。同。十。二。年。三。月。五。日。正。五。位。下。と。あり。郡。小。高。御。祖。神。社。赤。迹。云。此。高。皇。産。靈。神。あ。る。事。小。心。云。み。さ。と。く。高。皇。産。靈。神。あ。る。故。り。あ。ら。は。揭。つ。さ。て。上。件。社。々。の。事。と。も。玉。加。豆。良。小。委。く。論。ひ。此。社。の。と。多。殊。小。委。曲。は。辨。は。と。山。城。因。久。世。郡。小。水。度。神。社。三。座。と。あ。る。社。に。祭。神。を。山。城。風。土。記。小。天。照。高。彌。牟。須。比。

命。和多都彌豐玉比賣命とあり。此社も貞觀元年正月廿七日正六位上水度神後五位下と見ゆ。天照高弥牟須比命小冠とる。あらし天照の下子某命とあり。某神とあり。有る小合の脱たるあり。疑ふし。然らざれば。式子三座と有る小合のれむ。なり。前も豊玉の上子命字比賣命と三柱れらむ。高弥牟須比命和多都弥命豊玉比賣命と三柱れらむ。と思ひしかど。阿波国名方郡小和多都美豊玉比賣命と云。社といふ見え。餘書小め和多都美豊玉比賣命と云。ことあり。見え。れど。豊玉比賣命字の脱たる。小多。阿らざりけり。○赤迹云。神代物語百首小多皇産靈大御神の亦の御稱多天照高弥牟須比命と申に。此も天照大御神比賣命を分て。天日小坐。紫微宮に高天原小坐。つゝめ。御魂を分て。天日小坐。おし。万國を照し。知らし給ひ。小依。てあり。とあり。此めさる言ま。あぐら。中平田。大人の説ぞ。妥當小たこめ。る。

と清和天皇紀。貞觀十八年八月二日。授近江国正六

位上天高結神從五位下。とめ見えとあり。赤迹云。此も本結の間。御字無れど。高皇産靈神と多。決めがたし。と思ふも。ある。む。と。高魂とめ。書る。如く。御省ける。も。代實録に。系筑後国高樹神。神名式なる。武藏国大里郡高城神社を始。免て。諸国小いと多かれ。ど。大か。と。社號小を。て。後人。比。に。し。て。よ。定め。たる。げ。小。て。い。づ。れ。も。お。ほ。る。の。れ。く。た。ほ。ゆ。ま。だ。お。小。多。舉。げ。神皇産靈神の神皇産靈命。祭れる社也。神名式子。出雲国出雲郡小神魂神社。は。と。神魂伊能知怒志神社。神魂意保刀自神社。神魂伊豆乃賣神社。ま。多。清和天皇紀。貞觀八年三月二日。授大和国從五位下。神皇産靈神。正五位

下とも見えあり。此を目原坐高御魂神社二座の一座
小をあらじと所思る由ありて去れも玉加豆良り委
く云ゆ。扱又類聚国史十六卷小貞觀十七年三月廿九
日壬子朔云々授大和国正五位下天石戸別神靈產魂
命神並從四位下とあり。印本五字三代實録に奉り給
る。同神皇產靈神小をもと神皇產靈神命とあり。
神魂命神皇とあり。有むを脱字衍字錯亂等ありて終
小かく訓小くと解がとた神名をなせるも扱又とあり
らざるうささ位階の序次もとく符合ゆ。扱又とあり
名は出所の條を掲たる。春雨抄れるむむの神と信
濃国筑摩郡あり。いざとひ日記あるむむの神と抑
と美濃国小ありと谷川士清が和訓葉云云。抑と
大神の御社に官小知られ給。たざはと諸国小いと多
かるはく所思るふが。其を姑く置て。今世に第六天神

を云て祭れふ社數多ありて。其祭神は面足惶根尊か
る由云なれど。此を附會は説ふまを取る小足らば。古
も面足惶根命を祭る社實は皇產靈大神は齋き奉
は何処小もあることれし。實は皇產靈大神は齋き奉
れる社あるはきま。己委は考あり。其をまは印度の
古傳小。此大地に頂上放まで。遙小高た處に。大梵天
を。大自在天とも稱はる天界あり。其主宰は神は。
大梵王とも。大自在天王を。め申て。此を天地世界を創
造し。人種万物は生成せは祖神ある由云するの。此を
我が皇產靈大神は古事の。彼国小傳をれふ小。い

正し記説を聞ゆれむなり。まこと佛書小二十八天と云
を右の大梵王ふる由に牽強せたるを其佛説の世に
行をれてとゆ第六天れど云ことは稱ふる後此物
知らぬ神道學者ら其佛國の稱あはれ惡ひ且かの天
神七代地神五代おど云を妄説ありとも知らば
其第六代は嘗れるが面足惶根神なる故に此神然
也と爲たふ小く此を却りて太じた非事なり。然
む第六天神と云も強説を依上小我大皇國小良を志
からぬ名ふる事ハ論おた物から其神實は最め尊た
大神小坐ませざる粗略に思ふべき小を非ざるなり。此
いと長り糸を此小
る大略を云るなり。

産靈神二柱小 或も天之御關涉る事ども
中主神小も

古史傳云。宇麻志阿斯訶備比古遲神。天之底立神。二柱
も。天の萌騰る小因て成坐して。其を久美凝して。天日
は御國を修固め成給する神等れるおと著く。其をる
皇産靈大神の志の生出給ひて。事依に給る依小因れ
るおと。大地に生給る。伊邪那岐。伊邪那美二柱神小
御任まじ。大地に修固めし求給する小準へて悟る
修し。まゐる是をゆ延て次段吟云。三段を思ふ。因之底
立。神豊斟。神を根底。因の垂下る。因て成坐
て。彼因を修固免成給する神等。天。因根。因大地の三を
三段をゆ第四段まで。神等。天。因根。因大地の三を
作し免むが爲に。産成給する神等。天。因根。因大地の三を
固成さしめ給る事。此傳のみ違れるは。神世の傳を。

○造化參神略説下

○九

凡て此國の事を專に語
るに及ぶるは故なり。

又云。天之底立神亦名角。天地初發命時。天と萌騰
れる物。因り成坐ま。産靈神は御子をを申が。た
小似とれどめ。姓氏録は傳々小。此神の御末は氏々の
始祖。二柱産靈神小係カケる依り。産靈神をあらゆる神
等。本祖と坐に謂イハよと。事と見え。小況シと神名
式。出雲因神門郡に神魂子角魂神社と云あり。角凝
ま。ま。角凝命とも。天角己利命とも。あ
ま。だ。角魂神とも云る。ま。と知る。然れど産靈神
は御子をを申は小難カふし。中主神とゆ。其古語

拾遺小。二柱産靈神。其長男と傳。伊勢風土記。天日別命。天御中主尊。十二世孫ともあれどなり。
又云。天地初發。時小成坐セる神等。一神ヒトをシく無用
小成坐るをれく。天皇祖神の天因。大地根。因。作。給。え
む。爲。よ。天小二神。根。因。よ。二神。大地小二神。故。産。成。給。え
依。あ。と。疑。ふ。し。

記傳云。此三柱神ハ。今云。天之御中主神と。二柱如何カあ
ふ理ありて。何の産靈ムスヒ小をシて成坐セゆと云ふと。其傳
無けナき。知チがル。然シるは甚キも甚キも奇クしく靈マしく妙タ
なるナ。あらむ。と。成坐セる。む。されズ。其をシら

小心も詞も及ぶるきから縁ぞ固り傳れなきぞ諾あ
とせる。凡て古の傳あき事を己が心もて其理を考る
てたしめて小説くた外國のあらひ小ていと
妄なるわ
ざなるぞ。

古史傳云。天神の修固成是漂在國と言依し給するま
とを。濃く考ふる小。彼大詔命の旨ハ。彼むらくと漂
蕩へる一物瓊戈もて搔鳴して。先國土産信た基
成給ふとて始免て。國土を産み。青人草を産むま
とま
で。汝かきて詔するに。其の中小め。人草を生給えむ
おとを依給ふぞ。主とある大御心よも有る。故伊邪

那岐伊邪那美神のそれ大御心汝御心と爲多國土産
給ひて後小。いや速く。青人草汝生坐るあり。

又云。天神諸。伊邪那岐。伊邪那美。命小。天瓊戈を賜ふ依
おや汝師も如何ある所以とめ知信のらげ。と言れる
れど。此を二柱の産巢日大神れ。産靈の御徳を。伊邪那
岐伊邪那美二柱神小。靈幸ひましく。國土を生み作成
まめ給えむ。其御璽をして賜ひやむおとを。云も更小
て。殊小を彼浮雲れ。根係る所あきか如くして漂蕩す
ふ一物の叢々やしく堅まらげるを。晝凝して。大地は

固免れ柱小せとせの御量小ぞ有る。

古傳翻按云。古事記よ。於是天神諸命以詔伊邪那岐命。伊邪那美命二柱神修理固成是多陀用幣流之國賜天沼乎而言依賜也。云々。やある天神も高皇產靈神。神皇產靈神二柱ふ。諸とは。二柱を集めて申せる。天。神小屬たる言れり。其を記傳ふ。天石屋れ段。八百萬神諸咲倭建命の段。后等及御子等諸下到而云々。孝謙紀。皇太后れ宣命小。汝多知諸者吾近姪奈利稱德紀。乃宣命小。天下能人民諸乎。賜云々。など有る。是等也。

同じ例小て古語れ用さまあり。どあふの如し。さて數多れ神あらざふ。諸とめ云。免。二柱を諸といふと云るを。い加小と思ふも有る。今めなほ二人互にもものほるを。モロトモニ云々と云ひ。又此。因言。我石見。夫婦ものほるを。モロムキ云々と云ふ。おれらみなたゞ二人。モロトモとめ。モロムキとめ。云る。おれ。おれ。古言れ。残れる小。此。モロトモ。モロムキ。れ。モロ。即ちモロモロ。れ。モロと。同言。ること云。も更。あり。ま。正月の飾。用る。齒。又。名。長。を。モロムキ。と云。も。葉。と。葉。れ。相對。る。を。以て。名。々。し。もの。れ。

○造化參神略説下

○十二

されど。モロモロ也。ちのみ多加らばともたゞ二
柱をも云しおや何の疑えむ。今云此事を玉加豆良小
が此翻案及彼玉加豆良の全説を因よあゝ小ものし
て説れ可否をも普く它よ問まほしけれど議論めた
あるおとを掲むる初學は徒のとめよまどはし
からむこを願ひく今をそれ一斑を示はのみ。
玉加豆良云。大虚空は中小一物を産成給るる。高皇
産靈神。神皇産靈神二柱を依おと。先達は既に顯宗天
皇紀れる。月日、神は詔言は引ま。丁寧反復す説に加れ
たおが如し。はまを其一物の分判て天を成り。地と成
す。其地は修理固成也。伊邪那岐命伊邪那美命小事

依給する天神諸も亦。二柱産靈大神あるおと著明小
て。天之御中主神も。其一物は造り坐る事小さる。御親
は預り坐びして。その一物の分判し地を修理固成也。
詔ごち給ふおと小のみ。いのでり親くも預り給えむ。
但し産靈神の彼一物を造り坐り。伊邪那岐伊邪那
美命を生おまこ。云々の旨を事依し賜するまで。悉
小天之御中主神は。大御心を御心として。ものし給ひ
おむと云。巻も更小て。其大元は。大元を。かあらば天之
御中主神は。止まれること。と申は。も更れ。是を以
て二柱の産靈は。御間子坐る神等。は。め。天御中主神
幾世之孫と云。傳彼此見え。と。叔。かく御親ら預か
る給え。さ。幽。き。所。以。ある。事。小。て。却。ゆ。其。神。徳。は
大なる故。小ぞ有る。た。の。と。上。る。考。徳。或。人。問。天。之。御。中。主
給は。穴。か。し。お。ね。な。見。過。し。る。考。徳。或。人。問。天。之。御。中。主

神れ。彼一物を産成給る事小。預給えざりし事也。何を以ての知れる。答。天之御中主神の彼一物故造成し給ふは事小。預と給えざりし事ハ。彼顯宗天皇紀ある。月神れ詔言小。我祖高皇産靈尊。有預鑄造天地之功云々と何ゆ。天之御中主神れ御名を詔え給。抑天之御中主大神也。最第一の神小坐也。二柱れ産靈大神也。其神靈小因。生坐れ也。天地を鑄造坐しこやに。御親預め給えむ小也。必其御名をよむ詔ふは也。高皇産靈尊云々。やしめ詔へるを以也。天之御中主神也。其事

小預め給えざりし事知られ也。再問。彼一物を造成たまへるもど也。必天之御中主神預め給えども。得あらぬとのやうに。凡人れ心よも思ひ泥まる。小就て考ふ小。若くは月神の詔言に也。我祖天御中主尊。高皇産靈尊。神皇産靈尊。有預鑄造天地之功云々。と詔ひけむ也。天御中主尊。神皇産靈尊。十字脱とる小也。あらざる小也。答。然らば。其も記傳也。此時今云彼顯宗天皇の當時也の由縁と見え也。山城国葛野郡。葛野坐月讀神社。名神大月次新嘗大和国十市郡小。日原坐高御魂神社。一座。並大

月次。壹岐嶋壹岐郡。月讀神社。名神大高御祖神社。對馬
新嘗。壹岐嶋壹岐郡。高御魂神社。名神大阿麻氏留神社。式
嶋下縣郡。抑如此後世まで其處々小重オモく祭祠マツルと給ふ
見えぬゆ抑如此後世まで其處々小重オモく祭祠マツルと給ふ
以て彼神着カミガリの詔言ミコトれねほろきれらざとほと
も産巢日神は御功ミコトの大きぬふほをめ思ひをか
傍トナリし。今云ふ史傳は心を用ひず引きたる故更ふ己
所あり看む人ミと云れぬは如く上件の社ども悉皆シツケ當
昔カミれ由縁ユカ小とれるおふぐ高皇産靈神はみふて天之
御中主神を祭とふ。一社とふあるふやれし然れど

脱字あるふあらばしる本文はまゝ宣ひやむ
といちふるく又神皇産靈神の御名も詔を文上件は
社とめれ中小此神は祭れるも無きぞおれを天地
を鑄造ツクリはし事小き預と給をばおが如しと雖大加
とい高皇産靈神は御名を以て傳ふとる。神皇産靈
神は漏し神皇産靈神の御名を以て傳ふたるは高皇
産靈神は漏して二柱は御上は且ナる事はめ二柱は御
名を竝ナ掲カるふ傳ふいと希スなりと。事記はオ既キく記傳キふ古
巢日大神の御事を記せる小ハ二柱并ナ出デるまるる處
をなくある。或時を高御産巢日神。或時を神産巢日御

祖命とかとぐ一柱此み出も坐をり天之御中主神
給ひ云々と云にかれありた。同日此論小あらざらぞかし。

古史徴開題記云。此は皇大御國の大御故事は傳乃起
原もしも天地を鎔造まじ。世は始め坐る。神魯岐神魯
美二柱産靈大神の御親成坐るまに。元をり所預
看あ、故事は天都詞の太詞事もま。皇美麻命の天降
坐に時小。大御口づから御言依し賜ひ。もと其千五百
座を多に坐る御子神等此。見知坐し聞知し坐る故事
はめ。其御齋は八十連次々遠長に聞繼ぎ語に繼ぎ。世

小め弘まり傳言來りあふも有る。云々。さて産巢
日大神の太詔詞もて。神の御故事を傳言坐る事ハ。何
れ由あらむと云小。祈年祭詞大嘗祭詞など。神漏伎
神漏彌命以氏。天社因社登稱辭竟奉皇神等。坐有思
ふ小。世に在る事も。悉く天神地祇は御心小漏る。あ
と無れど。神祭は主を爲給ふこと。御政の本れは故。予
美麻命は天降坐し。世を治め賜ふ小。まは天津神
因津神を齋祀祭り給えむ。あとを御言依し賜ひ。あ
るぐ。此事有むと某神の所業。其神もあはく。此

事を掌る神あきだ。其祭は志のぐ爲てと。言教る給ふやと。御傳へ坐る小ぢ有る。

古史傳云。神世に傳る。其世の神等とゆ次々小語に繼

來る説小を何と。前段今云、二段れり。と此段今云、三段ま

多次段今云、四段いふ。の傳れども。後小生坐る神等に。か

てめ其始字知看まじた事小し何と。皇産靈大神の。

御親に産靈小。鎔造し給ひお。看行し坐る在の儘に。

次々小語り繼し免給る傳小ぢ有る。

又云。彼一物も。三柱神に。始免ま生出給る物小。

即その成立をも直ち小看行し給ひお。其趣は語に繼し免給るる。

又云。世に初發の神等乃故事に。傳る給ふと。天

照大御神をたはし坐ども。必も高皇産靈神皇産靈

神ぞ專と御傳る坐む。然るは此二柱神をも。天地未

生ざりし前とゆ。本に高天原小御坐して。天地を鎔造

まし。世に始免賜る。神魯岐神魯美命ふませ。其神

世の故事は。御親成坐依隨。元とゆ所預看せむ。

○赤迹云。本上件々小類ある。いと。古史傳。平田翁の著書中。甚多く。たと神代の事。左も。

もたし諸局々々にもあられなる皇産靈大神の神靈小
とめて終小加く有る事。幽た譯にあ依るとある。傍し
とやう小い。たれとる事。せぬ。數ふる。違あらばとい
まどめ。それ。悉ふ。かたなら。む。却。初學。目う。初
意。味。は。深。長。し。う。童。叢。の。あ。え。や。は。く。解。か。ぬ。る。あ。と。い
小。あ。掲。げ。

神魯岐命神魯美命

神魯岐命神魯美命 古史傳云。あを 高皇産靈 二柱大
神魯岐命神魯美命

御神也。御稱也。して。所謂とさる。記せらる。古語拾遺よ。

高皇産靈神。是皇親神。神皇産靈神。是皇親神。也。あ。あ。小
留伎命。留弥命。

據れ。己。名。義。神。も。加。牟。と。訓。傳。し。加。美。と。云。え。又。加。牟。と

唱ふるも。語の上小在る。直よ下。語小續く。故れ。己。其も

神伊邪那岐命。神速須佐之男命。まゐ。神避神議あど。れ

如し。然る小仁明天皇紀の長歌小。賀美侶伎と見え。常

陸風土記。賀味雷岐賀味雷彌とある。此ら古た。あ。と

れ。ま。ば。今。め。加。美。と。も。訓。傳。く。や。呂。は。助。語。小。良。理。琉

禮とめ。活用く。辭れ。ゆ。但し。呂。と。も。活。用。く。ま。ご。く。思。ふ

と。布。欠。呂。疑。を。許。衰。呂。丸。も。有。あ。む。り。其。も。内。を。宇。都。呂。囊

呂。あ。ど。れ。類。い。く。ら。も。有。傳。し。岐。も。男。神。也。云。ひ。美。も。女

神。也。い。ふ。伊。邪。那。岐。伊。邪。那。美。命。也。岐。美。と。同。じ。然。れ。む

加牟漏岐。加牟漏美と申はる。即ち御祖男神御祖女神

と申に意あり。さて此二柱多。男女別と。一お小申に
せらる。加夫呂と稱す。其多。出雲國造神賀詞。高天
能神王。高御魂。神魂命と。是あり。此多。加牟呂岐と
訓て之。神魂命。小係ら。加牟呂美と訓て之。高御魂命
小係ら。然れ。唯。加夫呂を訓と。外お記ふ。知
信し。出雲風土記。熊野加。武呂命と。ある。須佐之男
命。の。おと。小。男女を。綴。ね。て。此。穢。よ。を。非。ぬ。ども
加武呂と。お。か。ゆ。め。云。る。例。あり。師。も。岡。部。翁。も。
加夫呂伎と。訓。きた。れ。と。稱。を。比。加。て。此。神魯
岐神魯美と。申。に。御稱。高皇產靈。神皇產靈。命。申。せ
る。の。始。小。て。常陸風土記。諸祖天神云。賀味雷岐賀味

雷彌とある如く。凡て此天皇祖神と。ち。更。れ。也。御祖
あらぬ神等。お。め。尊。み。て。之。か。く。稱。せ。ゆ。そ。を。神賀詞と
御魂神魂命と。ま。づ。云。く。下文。神魯岐神魯美命と。あ
れ。ど。更。あり。祈年祭。詞。六。月。月。次。祭。詞。鎮魂祭。詞。鎮火祭
詞。お。ど。小。神。漏。伎。神。漏。美。命。と。あ。る。高皇產
靈。神。皇。產。靈。命。を。申。せ。る。お。を。論。ひ。な。き。也。大殿祭。詞。
大祓詞。遷却。崇神祭。詞。お。ど。に。も。皇產靈。大御神と。天照
大御神。を。申。せ。依。小。て。知。信。し。然。れ。ど。本。也。二。柱。產。靈
神。を。申。せ。系。御稱。を。大御神。小。め。申。に。之。未。ある。お。と。別
小。其。大御前。小。は。か。ゆ。白。に。祝。詞。皇。吾。睦。神。漏。伎。神。漏
彌。命。登。と。あ。る。登。て。ふ。辭。小。も。知。ら。れ。大御神。を。女。神。と
ま。せ。ど。神。漏。伎。と

と申がとく然りとも神漏美と比み申さむ事缺る
る様れまば神漏伎神漏美と加祢稱し登てふ辞
て其意を知ら其神祇官は八柱神の最初小高御魂
せたる文れり其神祇官は八柱神の最初小高御魂
神魂命を本とゆ坐せせ餘ホカ。大御膳都神オホミツケ大宮能賣神オホミヤノメ
辭代主神コトシロヌシおとも坐せば此祝詞小め皇吾睦神漏伎命スミラワガムツ
神漏彌命登稱辭竟奉久と申せ此受ばゆ皇祖
神を申がたた字尊み御祖平準ナツ申せ依故小添
たる辭の登ある故思合せま辨ふ信し岡部翁説神
申に高御魂神魂命とゆ始末多伊邪那岐伊邪那美
命天照大御神まで凡くは男女皇祖神を申すと云れ
しを記傳小いかを記すと神呂岐神呂美と申す稱
え何れの皇祖神へもこととる言れまどめ祝詞小申せ

るも何れも高皇產靈神と天照大御神と二柱のみを
指し申せよと明しと云れしを却ていかとあり
其も神賀詞小め高天能神王高御魂神魂命とあるを
やま多古語拾遺子神呂美を神皇產靈神と當と依も
心得ぬ事れり師の云れしめ委からば此をいまでも
神皇產靈命は女神ある由を考得られは故の
誤アさる孝徳天皇紀に詔小我親神祖を何家は仲哀
天皇に申し給ふ神賀詞子加夫呂伎熊野大神を
依も須佐之男命に申しあま大國主神の御祖おれ
命と申せ仁明天皇紀に長歌小賀美侶伎能宿那毘古
るも同じなれ仁明天皇紀に長歌小賀美侶伎能宿那毘古
那を申せ依も尊みとれ野土多作堅米とあり祖
まと万葉おど小皇祖神と何る故め加牟漏岐と訓る

は非れ也。此も須賣漏岐を訓傳し。さて此言。師も神を
 皇と替れるれみ小多。同じ語ありと云れとれ也。少し
 く違ひ有傳し。其も神祖也。此れ二柱をり始免。上代
 の御祖等小限て申はを。皇祖也。皇美麻邇々藝命と
 也。以來。近に御代々まで改申は如く聞えたり。此詞の
 少り申さぞ我親神呂岐神呂美命と申せど。我親皇
 祖命と申さ交。まに加牟呂岐加牟呂美とは申せど。
 須賣呂岐須賣呂美と申さば。此れを以多異れる所以多知る也。
 ○と也。次傳多いふ事也。も。原書記傳史傳多始免
 の勢小と也。省たも。まに己が言は加るも。其所
 擲とる所。又原書小古書を引きたる。小其引れとる

原書とをわく。あがるがあるを。その原書と校
 合して改めとる所。又原書は本文とせられとる。其
 細注を細注れ。原書本文とつること。も。その
 小し其所小。大加と漏れ所も。あまぜなる。御
 社等れ所小。己が著た。書中の説字。摘出初。御
 事。赤迹云と標し。産靈神二柱。中。主。神。之。御。關。涉。る
 事。と。も。と。標。し。と。了。然。小。其。の。書。目。以。舉
 どの。甲の論とこの説と。その趣は。異。ま。る。と。や。あ。ら。む
 了。そ。あ。ら。ま。大。加。と。同。じ。事。を。赤。迹。云。と。二。所。は。掲。示
 も。い。と。見。小。く。た。も。の。あ。ら。そ。の。甲。と。乙。と。の。兩。條。は
 一。お。小。結。め。む。了。せ。れ
 う。る。さ。々。れ。む。ぞ。加。し。

此書を板小あらせと改訂由と

因ある教子等と云れとせむら。八百万千万と

大坐オホマシまに神の中ナカも造化サウジヤは參神の御名義ミナミヤシ神徳ミチク御座所ミマシ御社ミヤれどは事コトを誰タレめかたぐク窺カクひ知シり奉ツクらざる得ユあらぬとさあ家を其御名義ミナミヤシ神徳ミチク御座所ミマシ御社等ミヤナラの事を姑ニヤくはしれたる其御名義ミナミヤシ認風カキフ唱ナラ様サマはあふ書籍シヤクも無く師友シユあふさしき此コノことゆふるを己オノ等を始めて友人トモの中ナカも辨ワキつざ家者モノのいと多オホかるがうゝ海ウミぐるをけれぬいゝでは初ウヘマシ學マシれものぞめぬとあふをやはと通曉サトシるゝごと簡易コトズクナシにしる捷徑テミチなるものを書カキて得ユさせたまひてとと度タビまね

くあとらるをせむること此辭イハみかごとくはと去コノ年ゾに春ハルを因ユて發タチて浪速ナニハへものし秋アキを更シて京都ミヤトへ登ノボりて浪速ナニハと京都ミヤトの書肆フミヤをあまぬと見ミると次ツギにいまぞ參神の事コトをみま記シ志シ書シヤは見ミざ候コトもつけれどもよろゆ小便オシと海ウミした都會ミヤノの地チあそあら米師コメシもれと友トモもなく書シヤもなき片田カタキナカ舎シヤもたゞ我ガ石見イシミのみ加カきいげこもく教子ウシゴの云イハれあせ候コトやうふこそとあらめとたしをシ加カらるれとさしいでがまといれどたれとと教子ウシゴあらぬ田舎人イナカヒト等ナラにもあそ

やひく參神れ略説をだふ。うかぶをせまほしくま。
己十まり七の八おれ頃よやあはを。豫て三柱大
神の御名れ古書ふちりぼひとるまのたおめ。又御
名義を釋を神徳を贊稱たる先達の説等。何くれ
の書中とゆひろひる。免。まといが考へ得た。と
おぼゆる説を。負氣れをれを書加ふとめして。か
ゆ。參神諸傳説と題と。しもれ。四五冊。文庫
の片にみふうちやゆれ。たし。固れる族。と。郵送
しめて。ひらた。とる。ふ。もとよ。己。と。人。と。ゆ。決。を。れ

て記臆れ。あ。く。く。し。ま。た。れ。ふ。聞。し。事。を。も。け。ふ。ま。あ
こ。れ。れ。今。日。見。し。書。お。め。明。日。を。思。ひ。出。る。と。れ。あ。ら
ぬ。ぞ。か。ゆ。なる。の。故。小。た。ぼ。え。居。ど。も。得。あ。ら。ぬ。と
を。ば。い。い。も。ぬ。き。が。た。ゆる。僻。あり。ま。此。參。神。れ。諸。傳
説。を。も。頼。小。探。索。め。む。料。小。と。か。た。つ。め。た。ま。し。も。の
子。こ。そ。あ。れ。か。と。そ。免。に。も。人。よ。示。は。き。料。小。と。て。
も。お。し。小。と。あ。ら。ば。を。あ。さ。す。が。小。そ。れ。の。み。の。し
こ。ざ。に。し。あ。ま。だ。た。れ。し。こ。を。を。幾。所。よ。も。か。た。あ。ら
る。と。係。或。ま。か。お。ら。ば。の。も。ま。は。と。た。ゆ。る。と

をもかゝらばあるも甲は條子に記したをこの件
小丙の段はあはるを丁のとすは小擧とるれど。
すはる。いとともく志どあれおもはから。ぐぐく
したを削正。たらたぬを補ひ。みどれあはるを正し。書
名をもあらる免る。更小とこゝる小。な何あかば加
あを小みゆるやうはのみ多加れど。何くれとなは
こと志げくて。此書小はとあまといいとまは費さ
むるやれはとらしやれど。此まゝ。小板はやあらさ
せ。捨てやれりむと思ひたゆとふをゆしも。友人は

尋ね來り。机上をさしのごたていゑらる。此何ど
或人々は。造化參神の傳説を窺ひまおらせとるは
御傳記のたぐひやあると。彼方此方は書林にて探
索つれど。孰の書肆も。はる書といまご承をらば。記
傳や古史傳あどふこも。其參神は事と説盡された
ら來と云ひ。あるも某大人の物せられし某てふ書。
何先生は著をされしとくれは記等の中小め。參神は
傳説交りてやあらせ。れど。のみ答へしめられた。され
ど。それ記傳も史傳め。價貴をまば。購求むる小縁あ

く。それ餘ホカの書に中ね承説ども。た何とぞ何丁目
あしゆふあにといふこと。故書林も僕オレもせも小知
らざるが故。一々ソレ閱ヨミて其説等を撰エリ出イデせめ。うはさ
く容易クヤス加らぬぞ。徒タ小手テを束ツカねるやとぬ。抑ソク方イ今マ大
教院キョウインを始ハジメ免マフま。天下テンカの中小教院チュウコウキョウイン小コてき。參神サンシンと天照アマテラス
大御神オホミカミと。齋イツき祭マツり奉ツクる事コトを形カタゆにとる。天照
大御神オホミカミの御徳ミカミを。のちく窺ウカひ奉ツクま。徒タめあゆと
いるども。參神サンシンのは。うか。ひ奉ツクふことを得エざ。依ヨも
の。と多タりれど。いので其御傳記ミカミツタヒの類タガは。夙ムスく世ヨ小

公オホキミ平ヘ形カタらむ。しもがれと加カしめ。然シカる小此書コノミカミを。
參神サンシンの略説リョクセツ小コ。彼カ、或レ人ヒト々々は得エ未マ得エし。が依ヨ書ミカミをき
ぞ。彼カ、或レ人ヒト々々と同オホヒト様サマ小欲ホリにるものども。たえやに
く得エらる。速スハヤく世ヨ小公コノミカミよ志シとまへ。加カしと勸ス
むるよ。加カ多タはれる。やう。海ウミのいと多タを。れど。とやせ
まし。加カくやせま。しと。決サめ。かぬ。私シ旨メを語カゆ。る
小再コト。唆ソソく。云ク。縦ヨ令メ加カ多タ。小コま。れ。も。と。と。ゆ。大オホ人ヒト
し。た。と。ふ。れ。書ミカミ小コ。ら。げ。と。め。參神サンシンは。御徳ミカミを。窺ウカ
ひ。ま。お。る。傍ナドり。ら。む。う。ひ。ま。お。び。れ。徒タ。え。書ミカミを。得エる。も。

其説れ搜索小困し。み貧した輩を。大部の書を購求
る。れ料れくして。やも小參神の神徳をうかゞま
おらざと欲はる志あはも。うかゞひ日げらふもの
は。多免にき。いとたづねをけまば。いのでとくく
せ。切小にむるふ。もとよゆ上よい。ゆる如く。教子
ども。れ需求てやるさ。縁と。田舎人小示は。清れた料小
せ。思ひたちし。ふとあまば。唯や應へお。やめてか
あをながらめ。彫志めむと。れもひさど免て。人れ笑
えむこと。坂かへりみざるも。れのれを。田舎者な

き。何事小も便。何した田舎れ情態を。あづきと海
こ。れ都會は。屈ても思ひ出。お。やれ田舎に生きたる。
田舎小成長く。田舎小老えてむと。け。田舎人ども
を。志て。造化參神れ略説を。だふ。うかゞえせまほし
く。れもふ。う。海を。と。めかぬて。れ志。こ。ざ。ぞ。かし。
あ。く。い。ふ。き。明治八とせ。や。い。ふ。年。の。二。月。廿。五。日。れ
夜。京。都。室。町。三。條。小。寄。留。に。る。

石見人 可部赤邇

明治九年四月十四日出版御届

定價金廿五錢

嶋根縣平民

平野神社禰宜兼權中講義

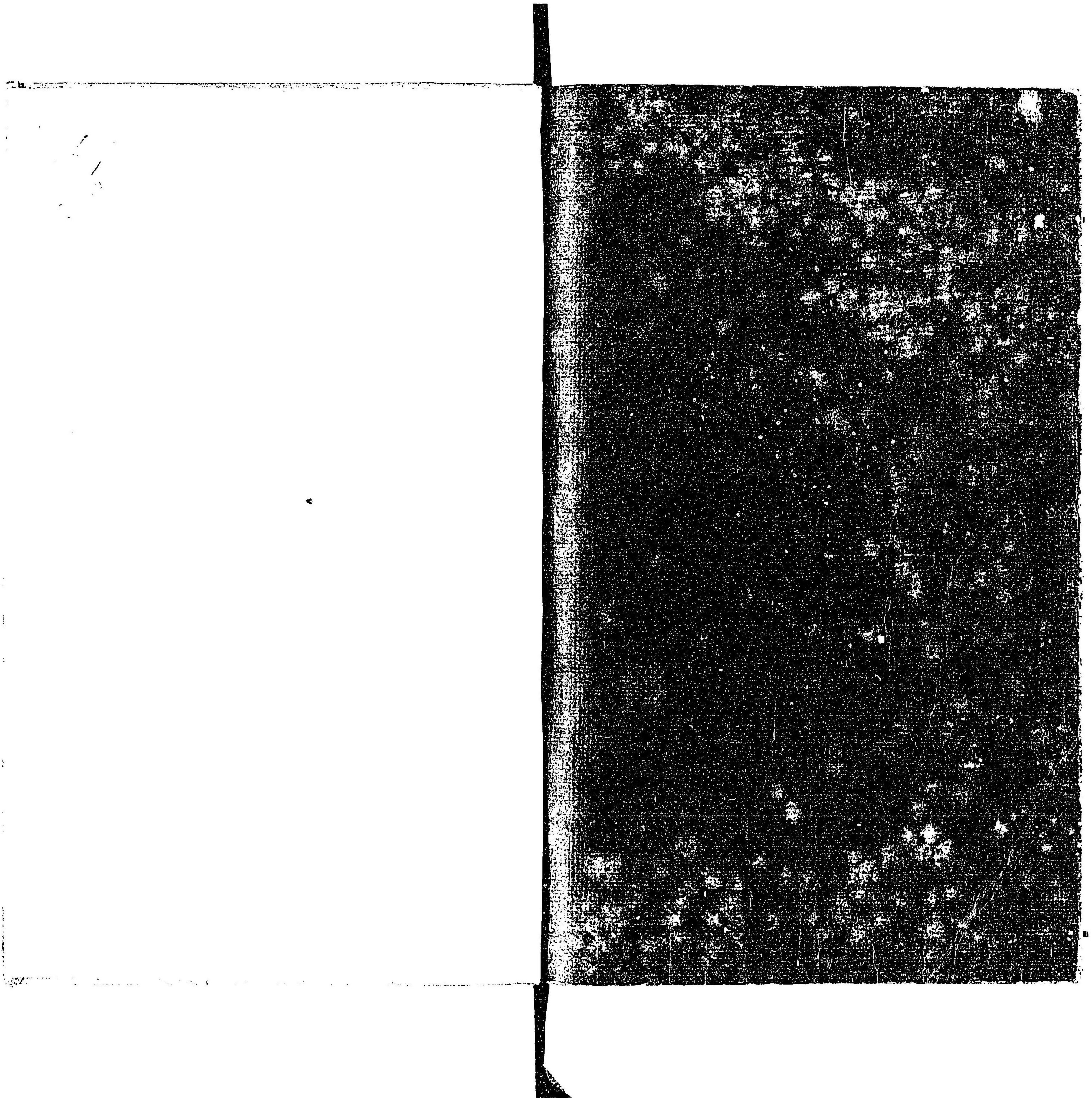
著述者並出版人

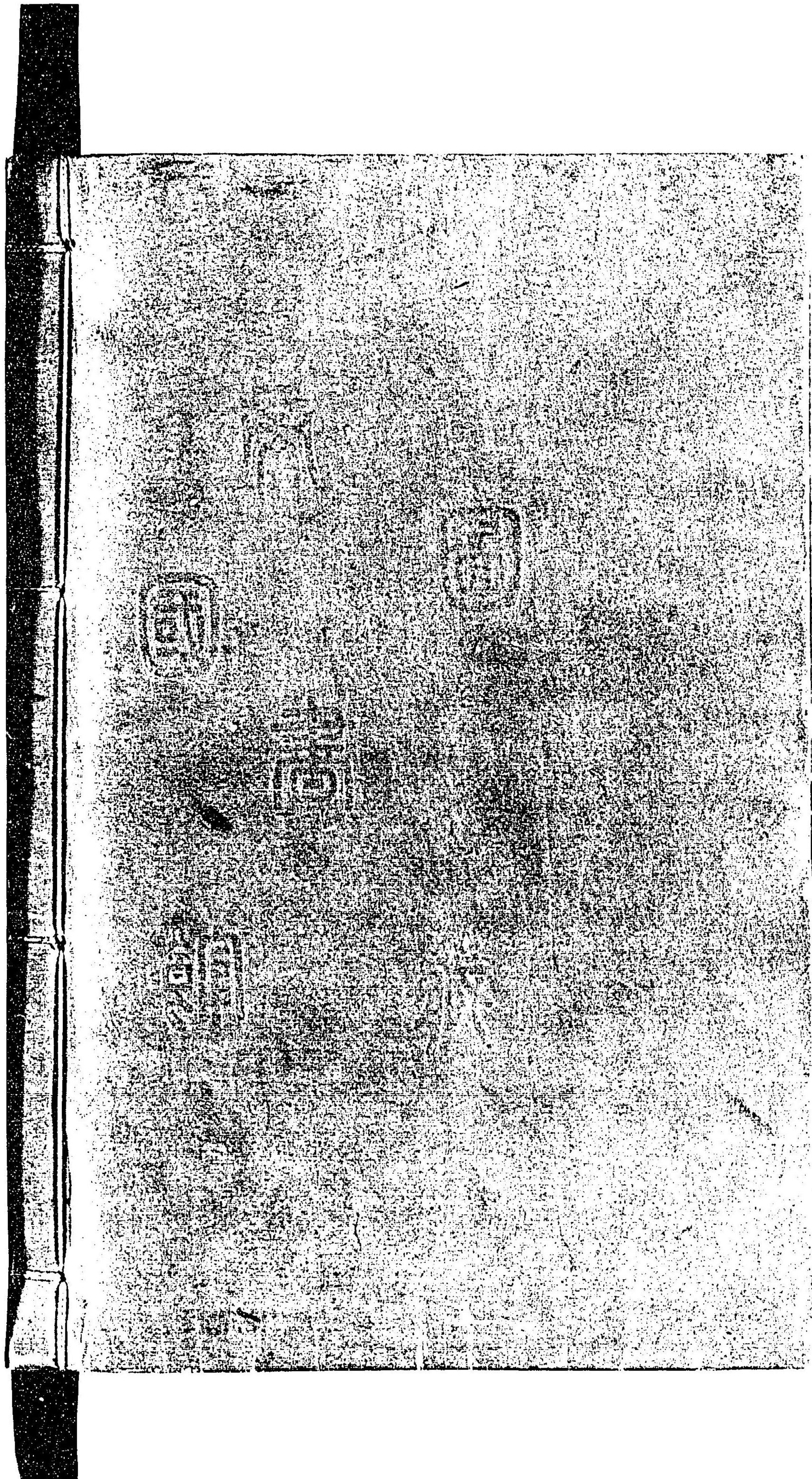
可部赤邇



京都府下上京第十六區

神明學西谷大作方寄留





014327-000-7

6-208

造化参神略説

可部 赤迹/著

M9

ABB-0672

